

江戸東京研究センター

I 2022年度 大学評価委員会の評価結果への対応

【2022年度大学評価結果総評】(参考)

江戸東京研究センターは2017年度に文部科学省の私立大学研究ブランディング事業の採択を受け、サステナビリティ実践知研究機構に設置された研究所である。

2021年度は同事業の最終年度にあたり、研究成果の取りまとめと発信を積極的に行ってきた。科研費をはじめとする多くの競争的資金を獲得し、多数の論文、書籍を発表し、新聞や書評にも多く取り上げられ、イタリアの大学からの英文書籍の刊行を計画するなど、国際的な活動も展開した。また、COVID-19の感染拡大を逆に機会ととらえ、オンラインによるシンポジウムや研究会活動を拡大することができた。こうした研究活動や国際的な広がりを持つ情報発信活動は高く評価すべきであり、大学のブランディングを高めている。

私立大学研究ブランディング事業は終了したが、これまでの業績に上積みを図り、江戸東京研究センターのプレゼンスの向上を継続できれば、学術面のみならず大学のブランディング向上にさらに貢献する。そのためには、2022年度以降の研究枠組みとテーマ設定が急務である。江戸東京研究センターは文系と理系の研究者が共同する仕組みを持っていることがユニークな特徴であるが、その中でどのような研究体制と考え方を構築するかが課題となる。

今年度は江戸東京研究センターの第2フェーズともいえる立ち上げの時期であり、グランドデザインを確立することが期待される。そうすれば、当初よりの課題である大学における江戸東京研究センターの位置づけもおのずと定まってくるものと思われる。

【2022年度大学評価委員会の評価結果への対応状況】

上記の総評にある2022年度以降の研究枠組みとテーマ設定に関しては、江戸東京研究センター全体の研究枠組みを再考し、新たに「文理複眼」研究の推進を目指すことで、従来の5つのプロジェクト(①～⑤)を3つのプロジェクト(A～C)に再編した。具体的には、従来の①「水都一基層構造」、②「江戸東京の『ユニーク』さ」、③「テクノロジーとアート」、④「都市東京の近未来」、⑤「江戸東京アトラス」からなる5つのプロジェクトをベースに、すでに文理協働を実践していた⑤の「江戸東京アトラス」を基盤と位置づけ、より実際の研究内容がわかりやすいように(A)「地理情報システムと名所の景観」と名称変更した。次に①と②を統合して(B)「江戸東京の文学と都市史」、さらに③と④を統合して(C)「表象文化と近未来デザイン」に再編した。市ヶ谷校地に理系のデザイン工学部が存在していることを活かして、個々のプロジェクトに当該学部からリーダーを選出し、文系のリーダーとの共同関係をスムーズに築けるようにしたうえで、2022年度の途中から徐々に新たな体制に移行しながら、それぞれに研究を推進してきた。

また、2022年度末には、江戸東京研究センター編『EToS 叢書4 新・江戸東京研究の世界』(法政大学出版局)として刊行し、2021年に5年間の各プロジェクトを横断する成果として行った全体シンポジウムの内容を踏まえ、今後の方向性を示した。それを踏まえ、江戸東京研究センターの第2フェーズとしてのグランドデザインを「記憶から創造へ」および「過去を知り、近未来への道筋を示す」とし、歴史的な記憶や経験を近未来の東京の創造に活かすための研究活動を行うことを目標とする。外部資金獲得のため、2021年度に申請した人文社会系を中心とした文部科学省の大型研究費支援および2022年度中に「文理複眼」を打ち出した大型科研費・科学研究費補助金基盤研究(A)の申請を行ったものの、不採択であった。一方、鹿島学術振興財団の国際共同研究は継続採択され、他の民間助成も複数採択された。これらの外部資金をもとに、引き続き、「文理複眼」を枠組みとした江戸東京研究センターの特色を生かした研究活動を推進し、国際的な共同研究やシンポジウムにおいて研究成果を内外にアピールすることで、当センターの学術的な存在意義をアピールしていきたい。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

II 自己点検・評価

1 教員・教員組織

(1) 点検・評価項目における現状

1.1 教員の資質の向上を図るための方策を組織的かつ多面的に実施し、教員及び教員組織の改善につなげているか。

1.1①研究所（センター）において研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための方策を講じていますか。	はい
1.1②上記項目で【はい】と回答した場合は、研究活動や社会貢献等の諸活動の活性化や資質向上を図るための取り組みの実績（開催日・テーマ・参加人数等）について記入してください。	
<p>例年の取り組みとして、定期的な運営委員会（月1度・Zoom会議）において、研究員（教員）相互の研究活動や社会貢献等について情報を共有し議論した。それ以外に、2022年度は以下の①～③における会議を行った。</p> <p>① 年度のはじめに研究活動についてのキックオフミーティング（対面）を開催した。 2022年4月30日「2022年度 EToS キックオフミーティング」BT26階A会議室</p> <p>② 科学研究費など大型科研申請のためのブレイン・ストーミング（対面）の会を開催した。 2022年7月22日「科研費申請に向けた打ち合わせ会」BT26階B会議室</p> <p>③ 年度末の報告会（対面）を行い、当該年度の研究活動および社会活動の総括と次年度における研究活動計画について議論した。 2023年3月1日「法政大学江戸東京研究センター年度末報告会」BT26階A会議室（参加人数21名）</p>	

2 教育研究等環境

(1) 点検・評価項目における現状

2.1 研究倫理を遵守するための必要な措置を講じ、適切に対応しているか。

2.1①研究所（センター）として研究倫理の向上及び不正行為の防止等について、公正な研究活動を推進するための適切な措置を講じていますか。	はい
【根拠資料】	
<ul style="list-style-type: none"> ・2022年度コンプライアンス研修受講者名簿 ・2023年度コンプライアンス研修受講予定者名簿 	

3 研究活動

(1) 点検・評価項目における現状

3.1 研究所（センター）の理念・目的に基づき、研究・教育活動が適切に行われているか。

3.1①研究・教育活動実績（プロジェクト、シンポジウム、セミナー等） ※2022年度に研究所（センター）として実施したプロジェクト、シンポジウム、セミナー等について、開催日、場所、テーマ、内容、参加者等の詳細を箇条書きで記入。
【シンポジウム・研究会】
① 研究会「東京(Tokei)-東京(Tokyo)原風景の光景」2022年5月7日、オンライン& G201教室、参加人数92名
② シンポジウム「川のエコヒストリーとスピリチャリティ～江戸東京の都市構造と精神性～」エコ地域デザイン研究センター、青山学院大学総合文化政策学会共催、2022年8月11日、青山学院大学14号館大ホール、参加人数79名
③ シンポジウム「都市における社会と空間のディテール EToS が探る文理協同のアイデア」2022年9月8日、市ヶ谷田町校舎マルチメディアホール、参加人数75名
④ シンポジウム「江戸東京の妖怪アート 文化遺産としての位置づけと活用のあり方」2022年11月12日、外濠校舎4階S405教室、参加人数28名

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

- ⑤ シンポジウム「祭りが生まれる時～銭湯山車巡行の試み」2023年1月30日、オンライン&市ヶ谷田町校舎5階マルチメディアホール、参加人数40名

3.1②対外的に発表した研究成果（出版物、論文、学会発表等）

※2022年度に研究所（センター）として刊行した出版物（発刊日、タイトル、著者（当研究所関係者は下線付記）、内容等）、論文（著者（当研究所関係者は下線付記）、タイトル等）や実施した学会発表等（学会名、開催日、開催場所、発表者（当研究所関係者は下線付記）、内容等）の詳細を箇条書きで記入。

【出版物】

① 書名：新・江戸東京研究の世界（EToS叢書4）

著者 江戸東京研究センター編（執筆者：横山泰子・田中優子・陣内秀信・小林ふみ子・川添裕・中丸宣明・高村雅彦・金谷匡高・稲葉佳子・根崎光男・岡村民夫・増淵敏之・米家志乃布・山本真鳥・山道拓人・北山恒・連勇太郎・栗生はるか・小島聡・石神隆）

出版社：法政大学出版局 発行年月：2023年1月

内容：はじめに（横山泰子）

[第一部 江戸東京研究の可能性をさぐる]

記憶から創造へ（田中優子）

過去を知り、近未来への道筋を示す（陣内秀信）

[第二部 都市をつくるのは誰か——一定住者と流入者・来訪者、それぞれの役割とまなざし]

江戸文芸のなかの外来者——方言と視点と（小林ふみ子）

「ビジターの都市」江戸、「ビジターの街」両国（川添裕）

自然主義作家たちの東京——花袋・藤村・秋聲（中丸宣明）

近代日本の幕開けを担った建築家たち——外来者がつくる明治東京の都市と建築（高村雅彦・金谷匡高）

都市をつくるのは誰か——一定住者と流入者、来街者、それぞれの役割とまなざし（稲葉佳子）

江戸の都市性と「公衆トイレ」（根崎光男）

[第三部 都市の表象文化 「名所」から「聖地」へ]

映画・アニメからみる東京表象（岡村民夫）

コンテンツツーリズムと東京・再考（増淵敏之）

鳥瞰図に見る江戸・東京の表象（森田 喬）

名所と視覚的経験——「江戸東京」の風景（米家志乃布）

コメント：東京をめぐる観光行動（山本真鳥）

[第四部 コモンズを再生する東京2021]

都市でコモンズを作れるか——下北沢 BONUS TRACK をケーススタディとして（山道拓人）

コモンズを再生する東京（北山 恒）

点在するリソースを繋ぐ——@カマタによる地域実験（連 勇太郎）

既にあるコモンズに寄り添う（栗生はるか）

コメント：縮小都市の時代におけるまちの世代間継承とコモンズ（小島 聡）

コメント：コモンズを再生する（石神 隆）

おわりに——次の新たなステージへ（高村雅彦）

② 書名：江戸東京の用水と水車が担う都市の近代化（EToS報告書12）

著者：高村雅彦

出版社：法政大学江戸東京研究センター、エコ地域デザイン研究センター

発行年月：2023年2月

内容：水車が担う都市の近代化

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

特集 水車が担う主な地域（中釜英里香）

各論 江戸東京の用水路

1～21 玉川上水

い～を 野火止用水

A～K 千川上水

a～f 三田用水

③ 書名：江戸東京の妖怪アート - 文化遺産としての位置づけと活用のあり方（EToS 報告書 13）

著者：岡村民夫・横山泰子 編

出版社：法政大学江戸東京研究センター 発行年月：2023年3月

内容：江戸・東京の妖怪情報—作品と記録の混在と融合—（湯本豪一）

杉浦日向子 江戸/東京の怪（岡村民夫）

まちを楽しむ方法としての妖怪アート（市川寛也）

コメント1 気軽に身近な妖怪アート（横山泰子）

コメント2 江戸東京と妖怪（神谷博）

コメント3 「あいだ」の妖怪（山道拓人）

④ 書名：大正・昭和の吉原遊郭（EToS 報告書 14）

著者：江戸東京研究センター/安原 眞琴 編

出版社：法政大学江戸東京研究センター 発行年月：2023年3月

論文標題：[講演] 吉原遊廓の「中の人」の手記—成八幡の支店さん・中野幸吉（安原眞琴）[対談]「生き証人にきく—吉原の昭和史」（聞き手：安原眞琴）（吉原達雄）

「私が暮らした吉原」（聞き手：安原眞琴）（不破利郎）[コメント] 田中 優子

[総合討論] 出席者：吉原 達雄、不破 利郎、田中 優子、小林 ふみ子 司会：安原眞琴

⑤ 書名：東京発掘プロジェクト 水辺編V（EToS 報告書 15）

著者：皆川典久

出版社：法政大学江戸東京研究センター 発行年月：2023年3月

内容：「東京発掘プロジェクト」とは？（皆川典久）

01. 舟運美術館

02. 目黒川舟入場をまちの発着点に

03. 河岸の更新 —時代を刻む日本橋川—

04. 都市の流速

05. かざぐるまの道

06. 東京の水辺に賑わいを —御茶ノ水・水道橋—

07. 亀島川の湊再編 —「抜け」がつなぐ水辺空間—

⑥ 書名：東京空間人類学—踏査現代東京形成的脈絡

著者：陣内秀信

発行：遠足文化（中国語訳）発行年月：2022年6月

⑦ 書名：女性学長はどうすれば増えるか

著者：田中優子、高橋裕子、河野銀子、米澤彰純、佐々木啓子、黄梅英その他

出版社：東信堂

発行年月：2022年7月

⑧ 書名(報告書)：東京都新島村における伝統的な抗火石建造物群の台風15号・19号による被害調査(調査報告書)

著者：金谷匡高、邵帥、余鵬正他(新島抗火石町並み研究会)

発行：公益信託 大成建設自然・歴史環境基金

発行年月：2022年7月

⑨ 書名：イーハトーブ風景学 宮沢賢治の〈場所〉

著者：岡村民夫ほか

標題：「なぜ場所から宮沢賢治を読むのか」「イーハトーブの装景」ほか

発行：七月社

発行年月：2022年8月

⑩ 書名：宮沢賢治・沢村澄子 現象的書展

著者：沢村澄子、岡村民夫ほか

標題：ライフ・オブ・ラインズ 沢村澄子と宮沢賢治

発行：SoLUNA

発行年月：2022年8月

⑪ 書名：トスカーナ・オルチャ渓谷のテリトリー-都市と田園の風景を読む

著者：陣内秀信(共著)

発行：古小鳥舎 発行年月：2022年9月

⑫ 書名：東京水辺散歩～水の都の地形と時の堆積をめぐる

著者：陣内秀信(共著)

発行：技術評論社 発行年月：2022年10月

⑬ 書名：土木デザイン ひと・まち・自然をつなぐ仕事

著者：福井恒明・佐々木葉・丹羽信弘・星野裕司・末祐介・二井昭佳・山田裕貴・福島秀哉

哉

発行：学芸出版社 発行年月：2022年12月

⑭ 書名：〈怪異〉とミステリ

著者：怪異怪談研究会監修(横山泰子)

標題：第1章 歌舞伎と探偵小説

発行：青弓社 発行年月：2022年12月

⑮ 書名：建築雑誌 第137集 第1769号

著者：内藤啓太(pp. 20-21 寄稿)

標題：水が湧く一東京の湧水と庭園について

発行：一般社団法人 日本建築学会 発行年月：2022年12月

【査読付論文】

① 論文標題：山梨県小菅村集落における農村舞台の建築的特徴について

著者：金谷匡高、鈴木清

雑誌名：民俗建築 発行年月：2022年5月

② 論文標題：Study on gardening activities and water sources in Tokyo during the early

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

Meiji period (1868-1898)

著者：内藤啓太

雑誌名：PROCEEDINGS 13th International Symposium on Architectural Interchanges in Asia pp. 1035-1040 発行年月：2022年11月

③ 論文標題：江戸大名庭園における上水の影響-庭園経営と水源に関する研究-

著者：内藤啓太

雑誌名：日本建築学会計画系論文集第87巻第802号 pp. 2654-2665 発行年月：2022年12月

【論文】

① 論文標題：Waterside Culture in Edo

著者：Yuko Tanaka

雑誌名：STORIA URBANA 発行年月：2022年4月

② 論文標題：Preservation and Continuation of "Local Ecosystem":The case of Tokyo's Public Baths

著者：Haruka Kuryu

雑誌名：STORIA URBANA 発行年月：2022年4月

③ 論文標題：新島抗火石の町並み-台風被害調査と島内外における抗火石建造物の保存活用に

向けた取り組みについて-

著者：金谷匡高

雑誌名：民俗建築 発行年月：2022年5月

④ 論文標題：総合知の行方

著者：田中優子

雑誌名：IDE 現代の高等教育

発行年月：2022年5月

⑤ 論文標題：宮沢賢治と遠野物語的世界

著者：岡村民夫

雑誌名：現代思想七月臨時増刊号 発行年月：2022年6月

⑥ 論文標題：「雅俗」をどう語り直すか：大田南畝を視座として

著者：小林ふみ子

雑誌名：『雅俗』21号 発行年月：2022年7月

⑦ 論文標題：江戸大名庭園における滝と上水の関係性について

著者：内藤啓太

雑誌名：日本建築学会大会学術講演梗概集 F-2分冊 pp. 559-560 発行年月：2022年7月

⑧ 論文標題：パンデミックを乗り越えた水都・東京

著者：陣内秀信

雑誌名：三田評論 No.1269 発行年月：2022年8月・9月

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

- ⑨ 論文標題：江戸の「公衆トイレ」と衛生環境
著者：根崎光男
雑誌名：『日本歴史』第 892 号 発行年月：2022 年 9 月
- ⑩ 論文標題：江戸の「公衆トイレ」と都市衛生
著者：根崎光男
雑誌名：『人間環境論集』（法政大学人間環境学会）第 23 巻第 1 発行年月：2022 年 10 月
- ⑪ 論文標題：最上川洪水時の浸水と土地利用 —山形県大江町百目木地区を対象に—
著者：鴨潤矢，岡田一天，福井恒明
雑誌名：第 66 回土木計画学研究・講演集（CD-ROM） 発行年月：2022 年 11 月
- ⑫ 論文標題：清水港における港湾と背後地域の連携
著者：前澤健心，荻原知子，福井恒明
雑誌名：第 66 回土木計画学研究・講演集（CD-ROM） 発行年月：2022 年 11 月
- ⑬ 論文標題：多摩川スカイブリッジにおける景観検討
著者：山本晃久，鈴木伸也，本田卓士，徳永詩穂，赤木重文，福井恒明
雑誌名：景観・デザイン研究講演集 18 発行年月：2022 年 12 月
- ⑭ 論文標題：土木学会デザイン賞受賞作品にみる街路空間デザインの特徴の変化
著者：山田莉緒，福島秀哉，福井恒明
雑誌名：景観・デザイン研究講演集 18 発行年月：2022 年 12 月
- ⑮ 論文標題：近代以降の隅田川右岸の中小河川における橋詰広場の変遷分析
著者：原田真央，荻原知子，福井恒明
雑誌名：景観・デザイン研究講演集 18 発行年月：2022 年 12 月
- ⑯ 論文標題：重要文化的景観選定範囲内における公共事業設計協議の実状と課題
著者：福井昂平，福井恒明
雑誌名：景観・デザイン研究講演集 18 発行年月：2022 年 12 月
- ⑰ 論文標題：都市形成過程と地域イメージからみる盛岡市中心市街地の地域らしさ
著者：荻原隆太，福島秀哉，福井恒明
雑誌名：景観・デザイン研究講演集 18 発行年月：2022 年 12 月
- ⑱ 論文標題：テリトリーオの営みが生んだ景観 - その再評価と継承の方法
著者：陣内秀信
雑誌名：飯田市歴史研究所年報 20 号 発行年月：2022 年 12 月
- ⑲ 論文表題：研究者たちの指針としての日本学術会議
著者：田中優子
雑誌名：学術の動向 発行年月：2023 年 3 月
- ⑳ 論文表題：近代東京の名所体験 - 名所図会・案内本の分析を中心として -
著者：米家志乃布
雑誌名：法政大学文学部紀要 86 号 発行年月：2023 年 3 月

【学会発表】

① 発表標題：戦前日本における「千島」表象

発表者：米家志乃布

学会名：歴史地理学会 発表場所：滋賀大学 発表年月：2022年5月

② 発表標題：江戸大名庭園における滝と上水の関係性について

発表者名：内藤啓太

学会名：2022年度日本建築学会大会（北海道）発表場所：オンライン 発表年月：2022年9月

【作品】

作品名：ICI STUDIO W-ANNEX

設計者名：ツバメアーキテクト+前田建設工業+プレイスメディア（山道拓人）

雑誌名：新建築

発表日：2022年5月号

作品名：奈良井宿 古民家群活用プロジェクト

設計者名：ツバメアーキテクト（上原屋）（山道拓人）

雑誌名：新建築

発表日：2022年5月号

作品名：森の端オフィス

著者名：ツバメアーキテクト+チドリスタジオ+飛驒の森でクマは踊る（山道拓人）

賞・媒体名：新建築

発表日：2022年10月号

作品名：庭瀬の公民館町家

著者名：ツバメアーキテクト（山道拓人）

賞・媒体名：新建築住宅特集

発表日：2022年11月号

作品名：横浜の住宅

著者名：ツバメアーキテクト（山道拓人）

賞・媒体名：新建築住宅特集

発表日：2022年11月号

作品名：建築作品 六角橋の四軒長屋

著者名：ツバメアーキテクト（山道拓人）・千葉元生・西川日満里）

賞・媒体名：新建築 2023年2月号

発表日：2023年2月1日

【書評】

評者名：根崎光男

雑誌名：『日本歴史』第893号

発表年月：2022年10月

対象書籍：塚本学『生き物と食べ物の歴史』

【著作について書かれた書評】

評者名：浜田弘明

媒体名：『法政地理』54
 書評掲載年月：2022年3月
 対象著書（著者）：『近世蝦夷地の地域情報』（米家志乃布）

評者名：上杉和央
 媒体名：『人文地理』74-1
 書評掲載年月：2022年3月
 対象著書（著者）：『近世蝦夷地の地域情報』（米家志乃布）

評者名：戸祭由美夫
 媒体名：月刊『地理』7月号
 書評掲載年月：2022年7月
 対象著書（著者）：『近世蝦夷地の地域情報』（米家志乃布）

評者名：澤田勝雄
 媒体名：赤旗
 書評掲載年月：2022年10月30日（日曜）
 対象著書（著者）：イーハトーブ風景学 宮沢賢治の〈場所〉（岡村民夫）

【その他】

標題：アートプロジェクトで、消えゆく場所に光をあてる
 著者名：栗生はるか（インタビュー）
 雑誌名：東京ビエンナーレ 2020/2021 見慣れぬ景色へ - 純粹×切実×逸脱 -
 発行年月：2022年4月

翻訳：「シネアスト高畑勲」 アニメの現代性（モデルニテ）
 翻訳者：岡村民夫
 著者名：ステファヌ・ルルー
 出版社：みすず書房
 発行年月：2022年4月

標題：銭湯と地域をつなぐ場に 北区・滝野川「稻荷湯」隣の長屋 6月末開業目指す
 著者名：栗生はるか（インタビュー）
 雑誌名：東京新聞
 発行年月：2022年6月

標題：「現代の長屋」に見る持続可能な「緩やかにつながる暮らし」とは？
 著者名：栗生はるか（インタビュー）
 TV番組名：Work mill with Forbes
 発行年月：2022年6月

標題：稲荷湯の修復・再生プロジェクト
 著者名：栗生はるか他（インタビュー）
 雑誌名：NHK 「首都圏ニュース」「おはよう日本」
 発行年月：2022年6月

標題：銭湯がつなぐ人とまちづくり 公衆浴場 SDGs
 著者名：栗生はるか（インタビュー）
 TV番組名：BSテレビ東京「日経ニュースプラス9」

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

発行年月：2022年8月

標題：対談・石川淳という、多彩なる運動体

著者名：鈴木貞美、田中優子

雑誌名：アナホリッシュ国文学

発行年月：2022年11月

標題：映画「テルマエ・ロマエ」ロケ地の銭湯に隣接する長屋を再生…湯上り客らが交流

著者名：栗生はるか（インタビュー）

雑誌名：読売新聞

発行年月：2022年11月

論稿：次なる暮らしの仮説 山道拓人

話者：山道拓人

雑誌名：新建築住宅特集

発表日：2022年11月号

標題：ブラミルク東京

案内人：金谷匡高、矢澤好幸他

主催：ミルクー万年の会

発行年月：2022年11月

標題：古民家再生：古民家のある「街」

著者名：栗生はるか（インタビュー）

TV番組名：NHKワールド「DESIGN TALKS Plus」

発行年月：2022年12月

討論：オープンスペースと緩やかなルール

話者：乾久美子×山道拓人×千葉元生×西川日満里×水野祐

雑誌名：新建築

発表日：2022年12月号

3.1③研究成果に対する社会的評価（招待講演、書評・論文の引用等）

研究所（センター）の活動に対して2022年度に得たと考える社会的評価（招待講演等）を記入してください。招待講演が学会発表の場合も重複してこちらに記入してください。※注

【招待講演】

① 発表標題：ティポロジアとテリトリーオ

発表者：陣内秀信

学会等名：『世界建築史15講』連続セミナー13

発表場所：日本大学「世界建築史15講」編集委員会 発表年月：2022年6月17日

② 発表標題：ウォーターフロント活用の可能性とその意義

発表者：陣内秀信

学会等名：大阪府建築士会

発表場所：大阪工業大学梅田キャンパス 発表年月：2022年7月1日

③ 発表標題：江戸東京の川と妖怪

発表者：横山泰子

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

学会等名：日欧ミーティング 渋谷川魂
発表場所：青山学院大学 発表年月：2022年8月11日

④ 発表標題：主体の虚構性と実体性——大田南畝周辺から
発表者：小林ふみ子
学会等名：神戸大学文学部国語国文学会 2022年度研究部会
発表場所：神戸大学六甲キャンパス 発表年月：2022年8月

⑤ 発表標題：都市における社会と空間のディテール「EToSが探る文理協同のアイデア」
発表者：栗生はるか、山道拓人
学会等名：法政大学江戸東京研究センター
発表場所：法政大学 発表年月：2022年9月

⑥ 発表標題：イタリアの都市空間とその描き方—ヴェネツィアを中心に—
発表者：陣内秀信
学会等名：鹿島美術財団東京美術講演会
発表場所：鹿島建設KIビル 発表年月：2022年10月13日

⑦ 発表標題：“Compiling the History of Ukiyo-e: The Expansion of Antiquarianism to Popular Culture in Late Eighteenth-Century Japan”
発表者：Fumiko Kobayashi
学会名等：Association for Asian Studies
発表場所：Boston, USA 発表年月：2023年3月

3.1④研究所（センター）に対する外部からの組織評価（第三者評価等）

※2022年度に外部評価を受けている場合には概要を記入。外部評価を受けていない場合については、現状の取り組みや課題、今後の対応等を記入。

・2021年度江戸東京研究センターの活動について外部評価委員会を開催した。内容は以下の通りである。

開催日時：2022年7月8日(金)10:00～10:55 オンライン会議（Zoom使用）

出席者：岡村民夫，小林ふみ子，山道拓人，田中優子，陣内秀信，高村雅彦，福井恒明
外部評価委員：高橋栄一（都市出版株式会社代表），藤森照信（建築家），吉見俊哉（東京大学教授）

【事務局】倉本英治，岩瀬加奈子，宮崎佳代子

1. ……………
会挨拶（陣内秀信）

2021年度の研究活動とその成果、さらに今年度から新しく取り組んでいる研究活動（イタリア大使館庭園調査など）について説明した。

2. 2021年度の活動報告

① 全体について（高村雅彦センター長）

EToSの現状と課題、2021年度までの5つのプロジェクト（①～⑤）を3つのプロジェクトに再編することを報告した。加えて、シンポジウム「EToSがつくる新・江戸東京研究の世界」やHOSEIミュージアム特別展などの成果について報告した。

① 「水都—基層構造」プロジェクト（高村）

シンポジウム「玉川をめぐる名水と歴史と景観～『中世武蔵国絵図』の読み解き～」や外濠市民塾、東京ビエンナーレにおける天馬船プロジェクトなどを取り上げながら研

究活動の内容と成果を報告した。

② 「江戸東京の『ユニークさ』」プロジェクト（小林）

「落語がつくる〈江戸東京〉イメージ」や「東アジア近世・近代都市空間のなかの女性」などのシンポジウムの内容と成果、今後の計画などを報告した。

③ 「テクノロジーとアート」プロジェクト（岡村）

「都市の表象文化 アニメ・特撮における東京」の内容と成果、そして今後の課題を報告した。

④ 「都市東京の近未来」プロジェクト（山道）

「 commons を再生する東京」（HOSEI ミュージアム特別展）や「MACHIYA Practical Handbook シン町家実践ハンドブック・序」を取り上げながら研究活動の成果と今後の活動計画を報告した。

⑤ 「江戸東京アトラス」プロジェクト（福井）

江戸から東京の「名所」の変化を地図上に表現する研究活動と成果、そして、その成果を公表するための準備について報告した。

3. 外部評価委員の講評

(1) 藤森照信委員（建築家）

多くの研究成果のなかで、興味深いものとして山道が中心となって進めている「シン町家実践」に関する研究活動があげられる。現在も駅を中心とした東京の大規模なブロックごとの開発が進められているが、それ以外の場所は「シン町家」的な動きが加速するだろうと思われる。このような意味において、このプロジェクトは現在の東京の町家の可能性を探るための調査と方向性を考えているものとして高く評価できる。もう一つ、HOSEI ミュージアム特別展で展示された「江戸城能舞台」の復元には驚いた。建築学科のモノを復元する能力と能楽研究所の資料が一緒になって生まれた素晴らしい成果である。

50年近く文系と理系の融合や異なる学問分野間の融合が叫ばれてきたが、現実的にはうまくいかなかった。個人的な見解ではあるが、いわゆる「文理融合」というものは個人レベルでは可能性があると思われるが、組織として実践していくことは大変難しい。吉見委員が指摘した「文理融合」から「文理複眼」への視点の転換はとても大事で、この「文理複眼」の姿勢で今後の研究活動を進めることで新しい学問の方向を示してくれることを大いに期待したい。

(2) 吉見俊哉委員（東京大学教授）

研究活動の成果をまとめた資料とプロジェクトごとの報告を受けて感じたことを個別的に述べてから、最後に全体的なことをコメントがあった。

① 「水都ー基層構造」プロジェクトについて

「中世武蔵国絵図」という成果をさらに発展させている点が素晴らしい。水系と道といった「地形」に着目した研究成果に加えて、新たに「地名」を深く掘り下げてみてはどうか。たとえば、今に残る豊島、渋谷、葛西など地名のなかには中世の名残や基層に関わるものが多い。しかし、このことは東京に住んでいる人々の間でもあまり知られていない。一般市民にとって身近な「地名」にスポットを当てることで、地名をきっかけに中世につながる基層について興味をもってもらう仕掛けとなるのではないだろうか。

② 「江戸東京の『ユニークさ』」プロジェクトについて

Intangible なものに注目して進めている研究活動は将来性があると思われる。都内に野生動物や野鳥が増えている現状を踏まえて、動物の視点から東京を見直すという新た

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

な視点を加えてみてはどうか。

③ 「テクノロジーとアート」プロジェクトについて

80年代以降、実際都内で映画撮影ができなくなったし、ロケができないために東京をきちんととらえられていないという岡村のエッセイ（岡村民夫「アニメ・特撮における東京の表象」『都市の表象文化 アニメ・特撮における東京』所収）が大変興味深く、その意見に全面的に同意できる。東京が「撮影困難都市」となったのには「警察の規制」や「地域ごとの利権」などが主な理由としてあげられているが、その実態と理由を綿密に調査してまとめることも重要なのではないだろうか。

④ 「都市東京の近未来」プロジェクトについて

「シン町家実践」において、若い人たちのゲリラ的な取り組みがたくさん紹介されていてすばらしい。この研究活動に加えてほしい二つの論点がある。一つめは、コモンズを作り出す際に、「身内（地元の人）」と「よそ者」がどうずればうまく相互関係をつくり、衝突を避けられるのか、うまくいくケースとうまくいかないケースを調べてまとめるとよいのではないか。二つめは世代について。まちづくりに共感し行動している世代はある特定の世代のように見える。40前後より若い世代。なぜその世代が「まちづくり」に惹かれるのかを世代論的に掘り下げてほしい。

⑤ 「江戸東京アトラス」プロジェクトについて

名所の分類や画像の特徴を地図化する大変興味深いプロジェクトの成果をぜひデジタルアーカイブ化して広く公開してほしい。さらに、本プロジェクトと類似なことを東京文化資源会議でも行っているのでぜひコラボレーションをしてほしい。

・全体について

藤森委員の指摘とおおり、組織的な規模での「文理融合」は不可能に近いと考えているが、「社会的実践」の場においては文系と理系がうまくコラボレーションできる可能性がある。たとえば、「シン町家実践」や「外濠市民塾」、あるいは地域の様々なプロジェクトに関わるなど大学の外に出て社会的な実践をすることで文・理がうまく協働できるようになるのではないだろうか。

江戸東京がグローバルシティとしてどうであったのか、という視点、つまり、江戸東京に関する研究活動にグローバルヒストリーの視点を加えることを希望する。

（3）高橋栄一委員（都市出版株式会社代表）

研究対象の広がりや研究成果をみて、充実した研究活動を行っていると思われる。出版に携わっている者として、落語の地名や東西の比較研究や、さらに「東京写真の新たな可能性」（研究会）のように写真家の4人を並べて、時代を論じたことが大変興味深かった。

地名、地形変遷などをデータベース化した地図情報システムが公開されれば利用する人が増えてくると思われる。

藤森委員や吉見委員が述べたように文理協働で成果を上げることは容易ではないのだろうが、研究の「場」があることも非常に大事である。現実的な諸問題はあるだろうと思われるが、EToSのように文理ともに集い研究を行う「場」が維持されていくことを期待する。

4.

会挨拶（田中優子）

外部評価委員の意見を通じて新しい視点の獲得と視野を広げることができた。EToSの研究活動の価値や意味、そして新たな可能性を探りながら研究活動を進めていくことが必要である。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

3.1⑤ 科研費及びその他外部資金の応募・獲得状況

※2022年度中に研究所(センター)として応募した科研費等外部資金及び2022年度中に採択を受けた科研費等外部資金について、研究担当者(代表・分担の別)、研究種目、事業名、実施年度、交付金額の詳細を箇条書きで記入。

1. 2022年度中に応募した研究費17件

(1) 研究代表者4件

- ・陣内 秀信 基盤研究(A)(一般) 場所の記憶とその地図情報の活用 - 新・江戸東京研究による近未来東京のデザイン 総額49,750千円
- ・木村 純子 基盤研究(B)(一般) テリトリーオ振興による持続可能なフードシステム構築 総額18,032千円
- ・高村 雅彦 基盤研究(B)(一般) 20世紀東アジアにおける集団住宅地に関する研究 総額19,720千円
- ・皆川 典久 挑戦的研究(開拓) 都市解説方法特論・東京発掘プロジェクト 総額5,100千円

(2) 研究分担者13件

- ・山本真鳥 学術変革領域研究(B) 流通班「グローバルとローカルの共鳴と相克のなかの工芸史に関する研究」
- ・米家志乃布 基盤研究(A)(一般) 場所の記憶とその地図情報の活用 - 新・江戸東京研究による近未来東京のデザイン
- ・岡村民夫 基盤研究(A)(一般) 場所の記憶とその地図情報の活用 - 新・江戸東京研究による近未来東京のデザイン
- ・福井恒明 基盤研究(A)(一般) 場所の記憶とその地図情報の活用 - 新・江戸東京研究による近未来東京のデザイン
- ・山道拓人 基盤研究(A)(一般) 場所の記憶とその地図情報の活用 - 新・江戸東京研究による近未来東京のデザイン
- ・高村雅彦 基盤研究(A)(一般) 場所の記憶とその地図情報の活用 - 新・江戸東京研究による近未来東京のデザイン
- ・田中優子 基盤研究(A)(一般) 場所の記憶とその地図情報の活用 - 新・江戸東京研究による近未来東京のデザイン
- ・松本剣志郎 基盤研究(B)(一般) 江戸東京移行期に関する総合的研究 一時間論・空間論からのアプローチ
- ・福井恒明 基盤研究(B)(一般) 設計競技方式を活用した都市デザインマネジメント手法の理論的・実践的研究
- ・山本真鳥 基盤研究(B)(一般) ミックスをめぐる多層的帰属の比較民族誌——オセアニアの先住民を中心に
- ・陣内秀信 基盤研究(B)(一般) テリトリーオ振興による持続可能なフードシステム構築
- ・横山泰子 基盤研究(C)(一般) 日韓中妖怪絵本比較による異界観研究を題材とした日本語学習者向けの日本文化教材開発
- ・増淵敏之 基盤研究(C)(一般) 韓国国内でのコンテンツツーリズムの浸透 - 観光行動の現地化と再帰性 -

2. 2022年度採択を受けて実施した研究費22件

(1) 研究代表者10件

- ・高村 雅彦 基盤研究(B) 東アジア都市の住宅地形成と集合住宅に関する学術調査 2022 1年間で総額¥1,000,000
- ・小口 雅史 基盤研究(B) 古代末期防御的集落の実態解明と、中世移行期日本北方世界を含む北東アジア史の再構築 2019~2022 4年間で総額¥17,160,000
- ・小口 雅史 基盤研究(B) 古代末期防御的集落の実態解明と、中世移行期日本北

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

方世界を含む北東アジア史の再構築 2022 1年間で総額¥1,300,000

- ・松本 剣志郎 基盤研究(C)(基金)近世都市インフラ維持管理の社会史的研究 2018～2023 6年間で総額¥2,080,000
- ・中丸 宣明 基盤研究(C)(基金)明治前期における新聞に付随する書籍・印刷物の研究2019～2023 5年間で総額¥2,990,000
- ・山本 真鳥 基盤研究(C)(基金)オセアニア植民地時代における非白人移住者の歴史人類学的研究 2019～2023 5年間で総額¥4,290,000
- ・川久保 俊 基盤研究(C)(基金)住環境改善がもたらす健康影響シミュレーション手法の開発 2019～2023 5年間で総額¥4,420,000
- ・小林 ふみ子 基盤研究(C)(基金)江戸狂歌資料による大衆的作者=読者の教養の研究 2020～2024 5年間で総額¥3,640,000
- ・米家 志乃布 基盤研究(C)(基金)近代日本のアートと地理空間 - メディア表象とパブリックアート体験にみる都市と地方 2022～2024 3年間で総額¥4,290,000
- ・岩佐 明彦 基盤研究(C)(基金)災害時居住環境におけるクロスオーバーモデルの構築 2022～2024 3年間で総額¥4,290,000

(2) 研究分担者12件

- ・岩佐 明彦 基盤研究(A) 【京都大学・牧 紀男】応急仮設住宅「学」の確立 2021～2025 5年間で総額¥1,430,000
- ・川久保 俊 基盤研究(A) 【千葉大学・正木 治恵】リアルタイム生活情報のAI解析による革新的高齢者ケア改善システムの確立 2021～2024 4年間で総額¥780,000
- ・小口 雅史 基盤研究(B) 【東京大学・小島 浩之】料紙分析の手法による中国古文書学の基盤構築とその応用 2020～2023 4年間で総額¥1,937,000
- ・小口 雅史 基盤研究(B) 【東京大学・小島 浩之】料紙分析の手法による中国古文書学の基盤構築とその応用 2022 1年間で総額¥452,788
- ・川久保 俊 基盤研究(B) 【岡山大学・鳴海 大典】暑熱リスク軽減を目的とした対策導入シナリオの地域特性評価 2022～2025 4年間で総額¥617,500
- ・福井 恒明 基盤研究(B) 【早稲田大学・佐々木 葉】地域水系基盤概念に基づいた水インフラとともにある暮らしの再生デザイン手法の開発 2022～2024 3年間で総額¥325,000
- ・小林 ふみ子 基盤研究(C)(基金)【中央大学・吉野 朋美】高大連携による古典文学の探究型授業の教材作成と教育モデル構築の実践的研究 2019～2023 5年間で総額¥273,000
- ・増淵 敏之 基盤研究(C)(基金)【大正大学・清水 麻帆】中国国内でのコンテンツツーリズムの萌芽—観光行動の現地化と再帰性— 2019～2022 4年間で総額¥897,000
- ・福井 恒明 基盤研究(C)(基金)【多摩美術大学・湯澤幸子】70年代の大野美代子のインテリア・橋梁にみる領域横断的デザインの可能性 2021～2023 3年間で総額¥715,000
- ・小林 ふみ子 基盤研究(C)(基金)【明治大学・中井 真木】近世後期の好古・考証研究の源流と展開に関する学際的国際共同研究 2022～2024 3年間で総額¥260,000
- ・陣内 秀信 基盤研究(C)(基金)【農林水産省農林水産政策研究所・須田 文明】食農コモン(ズ)のアントレプレナーシップ:フランスとイタリアの比較から 2022～2024 3年間で総額¥650,000
- ・川久保 俊 国際共同研究加速基金(国際共同研究強化(B))【横浜国立大学・鳴海大典】都市における暑熱リスク軽減を目的とした対策導入シナリオに関する国際共同研究 2018～2022 5年間で総額¥3,770,000

※注 社会的評価に該当するその他の例として、研究所(センター)がこれまでに発行した刊行物に対する2022年度に書かれた書評(刊行物名、件数等)や2022年度に引用された論文(論文タイトル、件数等)、掲載コンテンツダウンロード件数、表彰・受賞歴等も含む。研究所(センター)に該当するものがない場合は、研究所に所属している

所員によるものを含めることも可、その場合は研究所の研究領域に関する論文や刊行物等とする。社会的評価の対象となるものが論文や刊行物等である場合、それらが公表された時期については問わない。また、実績等は把握できている範囲で記入。

Ⅲ 2022 年度中期目標・年度目標達成状況報告書

評価基準		研究活動
中期目標		国際日本学研究所とエコ地域デザイン研究センターが共同することで、他の研究機関では見られない文理が一体となった研究活動を推進し、国際化の時代に対応した先端的な〈新・江戸東京研究〉を継続して、持続可能な地域社会の構築を目的とする学際的研究教育拠点の確立を目指す。
年度目標		2021 年度に 5 年間の成果のまとめとして、2021 年 9 月 19 日と 9 月 26 日に二週連続にわたってシンポジウム「EToS がつくる新・江戸東京研究の世界」を開催した。そこでは、当センター独自の新たな江戸東京研究の可能性を所属する研究員ら全員で探求できた。そのシンポジウムの内容を 2022 年度中に刊行する。また、研究の段階から文理が一体となって進められるよう枠組みのあり方やテーマの設定などに方策を練り、江戸東京研究センターならではの活動を実施する。これらの成果や未来への可能性を発信、強調することで法政大学のブランディング形成のために欠かせない組織であることを改めて示し、年度ごとに存続が図られるのではなく、当センターの継続的な設置を大学と協議していく。
達成指標		①2021 年度シンポジウムに関する著書の刊行、文理が共同で進めるための②枠組み、③テーマの設定。上記三つの達成、実現を指標とする。
執行部による点検・評価		
年度末報告	自己評価	S
	理由	①2021 年度のシンポジウムの内容をまとめて、江戸東京研究センター編・EToS 叢書 4 『新・江戸東京研究の世界』法政大学出版局、2023 年 1 月として刊行できた。文理が一体となって研究活動が進められるよう、②従来の 5 プロジェクトからなる全体の枠組みを 3 つに再編し、③それぞれに文系と理系のリーダーが協同する「地理情報システムと名所の景観」、「江戸東京の文学と都市史」、「表象文化と近未来デザイン」を新たなテーマとして設定して、当センターならではの活動を推進するための環境を整えた。
	改善策	とくになし
評価基準		社会連携・社会貢献
中期目標		持続可能な地域社会の構築を目的とする学際的研究教育拠点の確立の一環として、〈新・江戸東京研究〉の成果を広く公開し、社会と連携してその意義を確認し、そのことが多様な社会に貢献できることを示していく。
年度目標		①市ヶ谷地域の大学と高校、企業、商店街、学生とともに活動する外濠市民塾の活動 ②シンポジウム・研究会の一般公開 ③新聞社や出版社との連携による記事の掲載 ④著書の刊行 など多様な場面での社会への貢献、成果の還元を継続して着実におこなう。
達成指標		年度目標の①を 1 回、②を 5 回、③を 3 回、④を 1 回達成することを指標とする。
教授会執行部による点検・評価		
年度末	自己評価	S
	理由	①外濠市民塾の活動が読売新聞の取材を受け、都内版に記事が掲載されて社会との連携を広く提示することができた。

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

報告	② 5回のシンポジウム・研究会を一般公開する形で実施できた。 ③ 論文 20 編に加え、上記①のほかに東京新聞やテレビ各局、出版社との連携により、12 編の記事を掲載できた。 ④ EToS 叢書 4 の刊行のほかに、関係するものとして 10 編の著書を刊行することができた。
	改善策 とくになし
<p>【重点目標】 当センターの特色を最大限に生かせるよう、研究の段階から文理が一体となって進めることを重点目標とする。また、年度ごとに存続が図られるのではなく、当センターの継続的な設置を大学と協議していきたい。</p> <p>【目標を達成するための施策等】 研究活動における新たな枠組みのとテーマの設定を目標達成のための施策とする。</p>	
<p>【年度目標達成状況総括】 達成指標の成果報告に示したように、すべての年度目標を十分に達成することができた。法政大学として江戸東京研究センターを大学の研究ブランディング事業の拠点であると社会に広く標榜した以上、その約束を反故にしないために法人が当センターの位置づけをどのように考えているのか、また一方でサポートを大学に毎年要望し続けることがセンターの存続には欠かせず、附置研への再編の実現が研究活動を継続するための一つの達成目標でもある。</p>	

IV 2023 年度中期目標・年度目標

評価基準	研究活動
中期目標	国際日本学研究所とエコ地域デザイン研究センターが協働することで、他の研究機関では見られない文理が一体となった研究活動を推進し、国際化の時代に対応した先端的な〈新・江戸東京研究〉を継続して、持続可能な地域社会の構築を目的とする学際的研究教育拠点の確立を目指す。
年度目標	① 2020 年 1 月にヴェネツィアのカ・フォスカリ大学で江戸東京に関する国際シンポジウムを開催した。そのシンポジウムの内容を 2023 年度中に英語で刊行する。 ② 2024 年 1 月に再びヴェネツィアのカ・フォスカリ大学で江戸東京に関するシンポジウムを英語で開催予定である。本年は過去の国際シンポジウムの英語書籍での刊行と新たな国際シンポジウムの英語での開催を中心に、江戸東京研究センターならではの国際的な研究活動を実施する。これらの成果を発信、アピールすることで、法政大学のブランディング形成のために欠かせない組織であることを改めて示す。
達成指標	① 英文著書の刊行 ② 国際シンポジウムの開催、の実現・実施を指標とする。
評価基準	社会連携・社会貢献
中期目標	持続可能な地域社会の構築を目的とする学際的研究教育拠点の確立の一環として、〈新・江戸東京研究〉の成果を広く公開し、社会と連携してその意義を確認し、そのことが多様な社会に貢献できることを示していく。
年度目標	① NHK 青山カルチャーセンターにおける〈新・江戸東京研究〉連続講座への講師派遣 ② 研究会・シンポジウムの一般公開 ③ 新聞社や出版社との連携による記事の掲載 ④ 著書の刊行など、多様な場面での社会への貢献、成果の還元を継続して着実にこなす。
達成指標	年度目標の①～④において、江戸東京研究センター研究員による講義お

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。

よび研究会・シンポジウムの実施、記事や著書の刊行を指標とする。

【重点目標】

当センターの研究活動の特色として、国際化の時代に対応した先端的な（新・江戸東京研究）を継続して進めることを重点目標とする。

【目標を達成するための施策等】

2024年1月の国際シンポジウムにむけての準備とその開催を目標達成のための施策とする。

【大学評価総評】

私立大学研究ブランディング事業終了後の第2フェーズの時期を迎えた江戸東京研究センターが、そのグラウンドデザインを「記憶から創造へ」および「過去を知り、近未来への道筋を示す」として、歴史的な記憶や経験を近未来の東京の創造に活かすための研究活動を行うことを目標としたことは、本研究センターが本来の意味での社会貢献を目指そうとする姿勢の明示的な現れとして高く評価できる。また、研究センター全体の従来の研究枠組みを、(A)「地理情報システムと名所の景観」、(B)「江戸東京の文学と都市史」、(C)「表象文化と近未来デザイン」の三つのプロジェクトに再編成したことも高く評価できる。

外部評価委員が「文理融合」の困難を指摘して、「文理複眼」、「文理協働」を提起していることを受けて「文理複眼」の研究を目指すとしているが、「江戸東京アトラス」という4つ目のプロジェクトを立ち上げ、文理協働を実際に進めている点は大いに評価すべき点であると思われる。また、文理複眼についても、現実社会の問題解決を工学系が押し進め、一方で文科系がそれぞれの事象の本質に迫ろうとすることで、他の追随を許さない研究成果の分厚い蓄積に立脚した自信と自律性のある研究活動を推進していると感じ取ることができる点は大いに評価したい。江戸東京研究センターが、これまでの「ブランディング」の域を脱却して、法政大学を代表する地に足のついた基幹的研究機構のひとつとして、また、法政大学憲章にある「実践知」を体現する研究活動の担い手となっていくことを期待したい。

【法令要件やその他の基礎的な要件の充足状況の確認】

2023年度自己点検・評価シートに記載された
Ⅱ自己点検・評価(1)点検・評価項目における現状を
確認

法令要件やその他の基礎的な要件が充足していることが確認できた

<法令要件やその他の基礎的な要件が充足していない項目>

※ 回答欄「はい・いいえ」は法令要件やその他の基礎的な要件の充足を点検している。